みなおと

NO.8

秋田大学教育文化学部・教育学研究科情報誌 2018.11.1

秋田大学教育文化学部と秋田県中小企業家同友会が包括的連携協力に関する協定書を締結

秋田大学教育文化学部と秋田県中小企業家同友会は、それぞれの持つ人材、知識、情報などの資源を活用して相互に協力することにより、秋田県の発展に貢献することを目的として連携協定を締結しました。

主な連携内容は、フィールドワーク型授業における学生の受け入れ、共同研究・調査、講義、講演会等への講師の相互の派遣などです。

10月1日に秋田大学教育文化学部で挙行された協定締結式では、佐藤修司教育文化学部長と日野亨代表理事による協定書への署名が行われました。佐藤学部長は「秋田県中小企業家同友会には、これまで地域文化学科のフィールドワーク型授業である地域連携プロジェクトゼミで、本学の多くの学生を受け入れてご指導いただいてきた。現在、地域の人材養成のみならず研究についての貢献も本学部教職員に求められるところとなってきている。この協定締結を契機に、地域貢献ができる人材育成の更なる強化および教職員と中小企業家同友会の会員企業との密接な関係の構築をおこなっていきたい」と述べました。日野代表理事からは「これまでの地域連携プロジェクトゼミのような地道な取り組みが包括的連携協定につながり、さらに前進していこうとしている。企業にとっては学生の柔軟なアイディアや創造力を企業の活性化や創造性などにつなげることができるメリットがある。また、学生にとっても働く真の意味を理解し、中小企業の価値を体験することができる社会的に良い機会となっている。ともに協力しながら地域の活性化に少しでも貢献できるようにしたい」と挨拶がありました。

この協定によって、地域活性化に貢献する人材の養成がさらに充実されるとともに、学部と企業との共同研究・調査等が推進され、密接な関係が拡大・発展していけば、秋田大学の基本理念の実現や秋田県の発展につながっていくものと期待されます。

同友会からの出席者は、日野亨代表理事（日野代表取締役社長）、田口知明代表理事（田口木材代表取締役社長）、長坂博行理事・広報委員長（都市クリエイティブ代表取締役）、高橋基理事・社員共育委員長（たかえん代表取締役）、佐々木克己理事・共同求人委員長（むつみワールド代表取締役）、佐藤進幸共同求人委員会副委員長（佐藤徳太郎商店代表取締役）、二方淳介広報委員会副委員長（太陽印刷専務取締役）、武田佳朗理事・事務局長、三浦文枝事務局主任のみなさんでした。同友会の会員のみなさんには学生を温かく迎え入れていただき、成長をサポートしていただいていることに深く感謝いたします。

第４回あきたの教師力高度化フォーラム
「社会に開かれた教育課程」の実現と教師力－プログラミング教育と育てたい力

９月 29 日（土）の午前中、第１回秋田大学教職大学院惟蕗（いぶき）の会（教職大学院の同窓組織）が行われ、午後には第４回あきたの教師力高度化フォーラムが行われました。フォーラムには 150 人近くの方が参加しました。

第一部では、教職大学院の修了生で一期生でもある木村司（横手市教育委員会）様、門脇恵（秋田きらり支援学校）様から実践報告があり、第二部では、シンポジウム「プログラミング教育の展開」が開催されました。提案１では、秋田から、亀沢勉（秋田県総合教育センター研修班主任指導主事）様と村上宙思（附属小学校教諭）様から秋田及び附属小学校における取り組みが報告されました。提案２では、渡邊茂一（相模原市教育センター学習情報班指導主事）様から相模原市におけるプログラミング教育の実際が紹介されました。提案３では、川和田亨（戸田市教育委員会教育政策室指導担当課長）様から産官学民で進めている戸田市のプログラミング教育が紹介されました。その後、林良雄（本学部副学部長）の司会で、質疑、協議が行われました。

第３部では、教室を変え、プログラミング教育を実際に見て触って学んで体験するワークショップを行いました。渡邊様が講師となって、相模原市で行われているプログラミング教育の一端を体験することができました。

第４部では､安彦広斉（文部科学省初等中等教育局視学官）様から、新学習指導要領におけるプログラミング教育について、22 世紀まで生きる子供たちに必要な力とは何なのかという観点から講演が行われました。

秋田はプログラミング教育についてまだスタート地点に立っているという状況ですが、今後、子どもたちが生きていくことになる時代を見据えて、プログラミング教育に積極的に取り組んでいかなければならないことを強く感じさせられたフォーラムでした。

教職大学院の研修旅行（東成瀬・陸前高田・大槌）を行いました

10 月 18 日（木）から 20 日（土）まで恒例となった研修旅行を実施しました。現職院生 12 名、学卒院生 15 名が参加しました。

18 日は 9 時に大学を出発し、11:00 から東成瀬小学校、中学校で授業や学校の様子を参観するとともに、鶴飼教育長、加藤小学校長、大沼中学校長から説明を受けて、質疑を行いました。東成瀬での授業改善等に向けた長年の取り組みやその思いを直に聞けました。

19 日は 7：30 に東成瀬を出発し、10：30 から陸前高田市立高田小学校を訪問し、菅野校長から説明を受けた後、授業や学校の様子を参観しました。震災で学校にいた子どもたちに犠牲者はいませんでしたが、保護者への引き渡し後になくなった子どもたちがいること、震災後児童数が半分以下になり、今も徐々に減少していること、まだまだ子どもたちにはケアの必要があること、来年度に新校舎に移ることなどをうかがいました。

昼食は仮設で営業するカフェわいわいで取りました。マスターからは料理の解説とともに、震災後の状況や今後の事業展開の構想を聞くことができました。14:30 から 16：30 まで、陸前高田の語り部である河野正義さん（陸前高田市観光物産協会内観光ガイドの会）から現在の市内の様子を案内してもらうとともに、被災時の状況や復興の状況について説明していただきました。かさ上げ工事がだいぶ進んでいましたが、住民が戻れる状態になるにはまだまだ年月がかかる状況でした。

20 日は 10：00 から 11：30 まで、大槌の語り部である神谷未生さん（一般社団法人おらが大槌夢広場）から同じように現在の町内の様子を案内してもらうとともに、被災時の状況や復興の状況について説明していただきました。旧町役場ではこれを壊すかどうかについて町を二分する議論になっていること、両者の思いなどについても聞くことができました。大槌ではかさ上げ工事が終わり、住宅も建ち始めていましたが、こちらも元の状況に戻るにはまだまだ時間がかかりそうです。

この研修旅行は教職大学院の授業である「教職実践リフレクション－課題実地研究」として実施されました。この研修を通じて、授業力向上の先進的な事例に直に触れるとともに、同じ東北の地である東日本大震災の被災地がどのような状況にあるかを知る貴重な機会となりました。みんなで寝泊まりして学ぶので、修学旅行のような意味合いも持っているように思います。

地域連携プロジェクトゼミでバスツアー企画

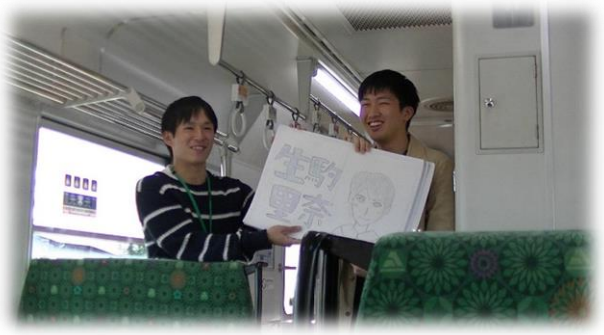
地域文化学科地域社会コース３年　池田　圭佑・清野　良太

私たちは「地域連携プロジェクトゼミ」という授業の一環で、有限会社都市クリエイティブの協力の下、由利本荘市矢島地域を対象としたバスツアーの企画に関わりました。ツアーは昨年に続いて２度目の敢行となり、私たちは 2018 年 5 月から企画に参加し、10 月 13 日にツアーが催行されました。

ツアーの様子は秋田魁新報に取り上げていただきました（10 月 17 日）。以下は、当日のツアーコースになります。

秋田駅発→羽後本荘駅→矢島駅（昼食・紙芝居上映）→龍源治（遠州流茶道体験）→福王寺（阿字観瞑想体験）→町めぐり（町中見所案内人同行）→鳥海荘（夕食・入浴）→星空観賞→秋田駅着

ツアーコースは昨年の先輩方が考案したものがベースとなっております。その中に、昨年のツアー参加者の方々に書いていただいたアンケート結果をもとに、昼食に地元の食材を使用した料理を提供すること、町めぐりの際にお土産品を購入する時間を設けることを組み込みました。具体的には、昼食の際に、地元で採れた天然鮎の炊き込みご飯と地元のお味噌屋さん（眞坂糀味噌店）の味噌を使用した味噌汁を提供すること、町めぐりの際に眞坂糀味噌店と、地元のお菓子屋さんである原田栄泉堂に立ち寄り、お土産を購入する時間を設けました。昼食とお買いものの際には、みなさんとても喜んでいる様子でした。



また、今回のツアーの大きな変更点として、羽後本荘駅から矢島駅まで、「おばこ号」の愛称で地元の方々に親しまれている由利高原鉄道に乗車することを組み込んだことがあげられます。これは、私たちが初めておばこ号に乗車した際、色鮮やかな外装・内装と、車窓から見える鳥海山と景色に感動し、ぜひともツアーに組み込みたいとお願いし、実現しました。

私たちが最も力を入れたことは、「矢島にもう一度来てくださる方を増やす」ことです。ツアーを盛り上げることはもちろん、矢島地域の活性化のためにどのようにすれば良いかを学生なりに考えました。そして、ツアー終了後も矢島が参加者の印象に残るように、手作りのパンフレットやツアーをイメージした小説を作成しプレゼントしたり、電車内でイラストを用いた由利本荘・矢島のＰＲを行ったりと工夫を凝らしました。

これからはアンケート結果を分析する予定です。その結果を地元の方にフィードバックすることが矢島地域の活性化への第一歩になると考えています。12 月 20 日に学内で行われる最終報告会で、アンケート結果を含めた詳しい内容を発表する予定なので是非足を運んでみてください。

大学祭とホームカミングデーが行われました

10 月 20 日土曜 15：00～17：00 に第 4 回秋田大学ホームカミングデーが、第 52 回秋田大学祭（20 日と 21 日の二日間）に合わせて行われました。教育文化学部の同窓会「旭水会」からは、人間環境課程卒業で、ＮＨＫ秋田放送局の気象キャスターであるの村木祐輔さんが、「秋田大学初の気象キャスターになるまで」と題して報告しました。

村木さんは平日夕方のニュースこまちで天気予報を担当しています。みなさんも応援しましょう。

大学祭は天気にとても恵まれて、秋のうららかな陽差しのもとで行われました。その様子を写真で紹介します。

特別支援学校も参加しています。

模擬店あり、歌あり、ダンスあり、ヤートセあり、オーケストラあり、展示あり・・・。来年もぜひ来てください。

師範学校とは？－学部の歴史をたどる⑤

本学部の前身は戦前の師範学校であったことに前に触れました。では何歳くらいの人が入学し、何年くらい学んでいたのか。

1873 年創設の伝習学校時代は修学期間３ヶ月でした。1874 年の太平学校時代には、課程を下等（6 か月、17 歳-40 歳対象）・上等（8 か月）に分け、下等修了者から上等進級者を選考しています。

1878 年 4 月に師範学校となり、小学師範科（修業年限 2 年、15 歳-30 歳対象）・小学師範速成科（修業年限 9 か月）・中学師範予備科（修業年限 3 年）・女子小学師範科（修業年限 3 年、15 歳-30 歳対象）・講習科（現職教員の研修機関）を設置しました。1882 年に小学師範科を改組し、初等師範学科（1 年）・中等師範学科（2.5 年）・高等師範学科（4 年）を設置（17 歳以上対象）します。

1886 年 8 月、秋田県尋常師範学校に改称し、本科 4 年制となりました。1898 年、秋田県師範学校と改称します。1908 年に、本科第一部（4 年制）・本科第二部（1 年制、中学校卒対象）となります。1925 年に本科第一部を 5 年制に変更します（2 年制高等小学校卒業者対象）。1926 年に専攻科（1 年制）を設置。1931 年に本科第二部を 2 年制に延長します。1939 年、本科第二部に「大陸科」 を設置します。

1943 年に秋田県師範学校・秋田県女子師範学校を統合し、官立秋田師範学校を設置します。本科（3 年制。中等学校卒対象）・予科（2 年制。高等小学校卒対象）となります。

1943 年以前の師範学校は、後期中等教育レベルで、小学校、高等小学校卒業者が入る、今で言えば高校レベルの学校だったわけですが、1943 年を境にして、高等教育レベル、専門学校レベルに引き上げられたことになります。

なぜ、このような第二次世界大戦のまっただ中で、戦局が悪化し、同じ 1943 年に学徒出陣、学生の徴兵猶予の撤廃が行われる一方でこのようなことが行われたのでしょうか。小学校教員の社会的地位の低さをなんとかしたいという、当時の教師たちの強い思い、様々な陳情、運動を背景にしていたのでしょう。このような難局で、国の未来がどうなるかもわからない時期であるからこそ、国の未来を背負うことになる子どもたちの教育にあたる教師は、高等教育レベルの教育を受け、不透明な未来を切り拓く力、見識を持っていてほしいという願いが現れたものではないかと思います。

戦況が悪化していた時代ですので、実際には高等教育レベルへの引き上げはほとんど実質化しなかったわけですが、1946 年の米国教育使節団報告書などにより、戦後の教員養成は大学で行われることになります。

初代文相である森有礼は 1886 年の師範学校令で、師範教育の目的を「順良・信愛・威重」の三気質を備えさせることとしました。森は、教育は国家繁栄のためにあるべきであり、国家発展の基礎は国民の普通教育にあると考えていました。そのためには教員にふさわしい人を得なければならないことから、そのような人物を養成する師範学校は大変重要なものと位置づけられます。教員は知識や技術だけでは不十分で、それ以上に善良なる人物でなければなりません。そこで三気質が重視されます。

師範学校の授業料は無償で、食物、被服（冬服・夏服・シャツ・靴下等 9 種類）、日用品（墨・紙・鉛筆等 6 種類）、修理及び湯浴、一週間手当などが支給されていました。卒業生には服務義務があり、卒業後 10 年間は県内で勤務することが義務づけられていました。

生徒は全員が寄宿舎に入居させられます。そこは、三気質を養成するための道場とされ、男女生

明治時代生徒服装の移り変り

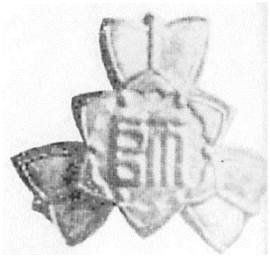
明 治 15 年 （秋田魁新報提供）

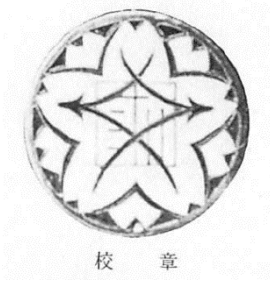
明治二十六年
明治三十七年 頃の男子の制服

明治37年頃のボート部
（旭川下新橋付近）

明 治 34 年

徒は生徒隊に編成され、軍隊式の生活が強制されます。起床、就寝、学科、食事、外出門限等がすべてラッパで合図がなされ、各室では靴下等のたたみ方、重ね方、寝具の整頓等がすべて定められていました。新聞や小説なども禁じられていて、密かに読むしかなかったようです。





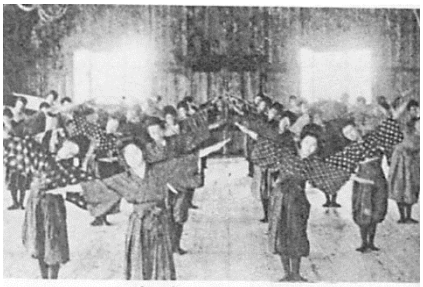
校　章

生徒は組長・什長・伍長等によって統括され、組長は舎監から命令を受けて、それを什長へ、什長はそれを各室に伝えます。兵式演習が行われ、そこでは舎監か体操教師が隊長となり、組長以下の者を部下の長として、それぞれ部下を指揮させました。時には深夜不時呼集のラッパが鳴り響き、すぐに武装を整えて校庭に整列し、そのまま行軍して夜が明けて帰校し、朝食もそこそこに授業が始まるということも度々あったそうです。命令には絶対服従で、厳格な規律にもとづく、軍隊組織によって、三気質を育成しようとしました。

また、森文相は「秘密忠告法」も推奨しました。これは、週単位で、一人又は複数の生徒を指定して、その生徒の振る舞い等について他の同級生が気づいたことを書面で忠告するもので、校長はそれを月末に集めて、人物査定の資料とします。実際に森が 1888 年 10 月 22 日から三日間秋田に来て、師範学校を視察した折り行った訓示の中で、この秘密忠告法を推奨しています。

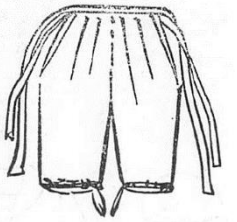
ただ、厳しすぎることへの生徒からの批判もあり、若干緩やかにはなります。寮の中でたばこを吸ったり、隠れて酒を飲んだりなど、一定の違反行為はよく行われていて、多めに見られていたようです。それでも、自由というにはほど遠い生活でしたし、戦争の色が濃くなると、また厳しさが増していくことになりました。

修学旅行は最初なくて、1890 年に東京で博覧会が開催された折、仙台まで武装で行軍し、仙台から汽車に乗って行きます。奥羽線はまだ着工されておらず、東北線も全通していない時代でした。1895 年には京都で内国博覧会が開催された折、徒歩で刈和野、横手、川尻に三泊して四日目の夜に黒沢尻に着き、そこから汽車で向かいます。まさに「行軍旅行」でした。1900 年には修学旅行として、土崎港から船で金沢、大津を経て、京都・奈良・伊勢を見学し、さらに東京・日光を回って黒沢尻から徒歩で帰校しています。日数はなんと約１ヶ月かかっています。定期的なものとして、卒業年度の参観旅行があり、県下の小学校教育の実際を視察するために、男鹿や鹿角、時に酒田などまで徒歩ででかけて二泊、三泊しています。



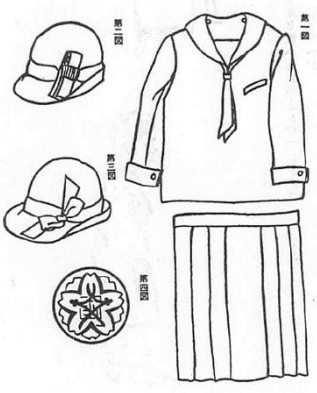
体　操　部　（大正３年頃）

制服は、男子の場合、軍服由来の今の詰め襟学生服が早くから取り入れられました。それに対し、女子の場合、1880 年の秋田女子師範学校発足の際は洋服で、1886 年の秋田師範学校への併設の際には和服になります。和服は、筒袖の綿服に袴を着ること、帯はメリンス又は木綿で、袴は木綿でえび茶色か紫紺色であること、儀式の時は白襟木綿の黒紋付き、髪は束髪でした。相当不人気だったようです。



女子の制服は、女子体操の必要から生まれたものです。強い兵士を作るには強い母親が必要だという考えから、女子も身体の鍛錬が求められるようになります。その変化は、日清戦争、日露戦争と、日本が海外で戦争を度々行うようになった時代に対応したものでした。

制服は 1929 年にセーラー服となります。冬服は紺で、夏服は白で、ネクタイは紺でした。1924 年制定の校章は、松葉で「女」の形を取り、桜の花の中に「師」を配しています。桜花は日本精神を、松は日本女性の節操を象徴し、緑は希望を意味するそうです（白黒なのでわかりませんが、地や線の色が緑なのでしょう）。制服、修学旅行、運動会、学芸会も森有礼が広めたものと言われています。



＊学部百年史等から作成【文責：佐藤修司】

本学部同窓会「旭水会」創立１３０周年記念式典が開催

10 月 27 日土曜日 11 時から、ビューホテルにて旭水会創立 130 周年の記念式典が開催されました。150 名を超える方々が参加されました。

旭水会は、本学部の戦前の前身である師範学校の同窓会として、1888 年にまずは秋穂会（しゅうすいかい）として発足しました。秋の実りを学校での学びの成果と重ね合わせて命名されたのでしょう。この秋穂会の発足から 130 年が経過したことになります。それ以前の太平学校、そして伝習学校は 1873 年発足ですから、学部としては、145 年が経ったことになります。

この秋穂会は 1895 年に旭水会となります。旭水会の「旭水」は旭川の別名で、旭川のほとりに学んだ者の集まりであることを表しています。旭川の名前は、九代藩主佐竹義和の命で、菅江真澄が太平山の旭岳（あさひだけ）にちなんで名付けたものだそうですから、「旭水会」の名前には、太平山からのぼる朝日の力強さと清新さが表現されています。旭水会のマークにはそのことがよく表れています。

また、秋田県立実業補習学校教員養成所、後の秋田青年師範学校の同窓会として 1925 年に発足した暁鐘会が戦後、旭水会に統合されて現在に至っています。「暁鐘」は人々に朝を告げるという意味から転じて、人々の覚醒を促すという意味があります。同窓会の名称にも、先人の思いが詰まっているように感じます。

このような長い年月の中での多くの先人の様々な苦労、努力、そして思いがあって初めて、私たちはこの 2018 年という時点を生きていられることになります。その間には戦争もあり、東北地方の冷害、飢饉、災害なども数々ありました。私たちは貴重なバトンを渡されているわけですから、次世代にそのバトンを確実に渡していくことが求められます。誕生日というと、何歳になったからおめでたいということだけではなく、生んでくれた親や、育ててくれた、支えてくれたたくさんの人に感謝する日でもあるべきです。誕生日と同じように、130 周年を迎え、これまでバトンをつないでくれた先人たちに深く感謝したいと思います。

考えてみると、誕生日のような情報は本人や家族、友人などにとっては重要でも、その他の人には価値の低い、すぐに忘れられてしまうものです。そのような情報と、それを大事だと思える心性を共有することが、帰属感、愛校心につながるのかもしれません。　　【文責：佐藤修司】

発行　**秋田大学教育文化学部／教育学研究科**
〒010-8502　秋田県秋田市手形学園町１－１　　TEL 018-889-2509　FAX 018-833-3049
教育文化学部・教育学研究科ＨＰ　http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/
学部研究科通信「みなおと」バックナンバー⇒http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/guide/gu_magazin.html
教職大学院通信「暁鐘の音（かねのね）」⇒http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/graduate/graduate_magazin.html
＊誌名「みなおと」の由来である秋田県女子師範学校校歌（1910 年制作）を聴くことができます。
http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/guide/gu_symbol.html をご覧下さい。